

ちょっとした幸せの時間

渡邊 義朗 一般社団法人日本エレクトロヒートセンター 理事

たまには釣った魚にも餌をやるかと、休暇を取って、以前から妻に何度も連れて行ってと言われていた山口県のリゾートホテルに行くことにした。しかし、私の車はマンションの機械式駐車場の地下側に停めていて、夏の大雨により水没してしまい、廃車している。足がないので、レンタカーを借りて1泊2日で行こうかと思ったら、そこは主婦。JRならいくらかかるかと。レンタカーとJRのコストを比較した結果、JRの方が若干安いと言うと、「なら、JRで」と即決。決断力は、私に勝る。

ということで、JRでホテルに向かった。小倉までは新幹線で、そこからは、在来線でゆったりとした旅。列車が下関駅を発車してからは、降りる人はいても乗ってくる人は誰一人いない。列車はのんびりと、ゆっくりと山の中を進んで行く。車窓が、海岸沿いの景色が変わったら、目的の駅に着いた。駅からホテルに電話したら、すぐに迎えに来てくれた。

この運転手さん、とても親切。頼んだわけでもないのに、我々の観光目的のひとつだった角島大橋（全長2キロ）に車を走らせてくれた。橋の途中で、車をとめ、降りて景色を見るよう勧めてくれた。車を降りて、来た方向を振り返ると、海の向こうに目指すホテルが……。期待以上のサービスに、満足の気持ちでホテルに。

チェックインを済ますと長い廊下を経て、部屋に案内してくれた。部屋のドアを開くと、そこは海。一面ガラスの窓に海が広がる。思わず「わぁ」と声が上がった。角島大橋も見える。「日の入りは何時か？」確認して、海岸を散歩。日本海の冷たい海と、東シナ海の暖かい海が混ざり合う地点で、今の時間は日本海からの荒々しい波が押し寄せ、穏やかな東シナ海に襲い掛かり海の中に白波が立ち上がっている。

目を移すと、サーファーが4人、戯れてる。繰り返し押し寄せる波にチャレンジ。1人は女性のような。まだ新米のようでみんなと離れて、波の小さなところでチャレンジを繰り返すが、なかなか上手いいかない。何度も何度も何度も繰り返す。見ている我々にもゆったりした時間が流れていく。「この時間帯は、みんなは仕事をしているなぁ」と思うと、ますますなんだか得した気分になる。日が落ちて来たので、ホテルへ。

旅行先をこのホテルにしたのは、「露天風呂から海にしずんでいく夕陽を眺める」のが一番の狙いだった。見逃すまいと、風呂に急ぐ。風呂でそこそこお湯をかぶると、露天風呂に飛び出した。先客が5人ほど。みんな私より、ちょっと上の年齢みたい。みんな黙って、沈む太陽の方角を見ている。冷たい海風がほほを刺す。どんどんと太陽が傾き、海が真っ赤に染まった。太陽が、海に沈んで行く。もう、半分が隠れた。ほほが冷たい。顔を洗う、ほほにぬくもりが戻った。やがて、すっかり太陽が沈んだ。黙って一点を見つめていた人たちが、黙って内風呂に戻る。満足げな表情いっぱい。

風呂の後は、夕食に。和食を食べることが多いので、今回は、フランス料理とシャレ込んだ。赤ワインで乾杯しながら、料理を待つ。フランス料理といっても、田舎のホテルなのであまり期待していなかったが、これが本当にうまかった。福岡で味わうフランス料理とはずいぶん違い、これまで食べたことがない食材の組み合わせ、食感で、趣のあるメニュー。予想以上の味わ

いに満足満足大満足。

海風を聞きながら、眠りに落ちる。朝起きると、もう一度、露天風呂に。今日は海は荒れている、ビュービューと音を立てながら。冷たく強い風が吹く中、ぶるぶる震えながら露天風呂につかる。顔はとても寒いが、体はぼかぼか。ゆったりした気分ひたる。絶好の骨やすめになった。朝食後、新幹線の新下関駅までは1時間かかるのにホテルの車で送ってくれるという。またまたラッキー。

新下関駅について、今回の旅行のもう1つの目的地である「唐戸市場」に向かう。市場前のバス停で降りたが、人っ子一人居ない。「あれ？ まちがったかな？」と思いつつ歩いて行くと、やがて市場の看板が見えた。市場に入って、驚いた。人がごった返している。「なんだ、この人ごみは」というくらいの人、人、人。「いらっしゃい、いらっしゃい」という魚屋さんの売り娘の声があちこちであがっている。家族連れ、グループで来た人たちの声が響く。

伸び上がって、人の肩越しに覗くと、縁台の上には、「握りすし」がいっぱい。売り娘さんが、皿と箸を差し出す。受け取った客は、縁台の上から自分の欲しい握りを取り、皿に盛る。「大トロ、あぶりとり、サーモン、えび、さば、あじ、ふぐ……」他の客と競っているのではないけれど、安さについつい手が出てしまう。魚屋さんも、単に、刺身で売ったら儲けは少ないが、「すし」にすると、付加価値が何倍にも増す。いい商売だ。まるで、投売り、笑いが止まらないだろう。漁師ではどうしても収入が限られると思えるが、ここなら「店構えもいらぬ、冷たい風が吹きすさぶ空間に、人が群がってやってくる。」「唐戸市場」というブランドに、「新鮮さと安さ」を求めて人が群がってくる、観光バスが押し寄せて来る。このブランドを立ち上げた人は、すばらしい発想力の持ち主だった。

どこの魚市場も、こうした付加価値商売ができていけると、そうはなっていない。関門海峡に観光に来る人という財産を、見事に、商売に利用した。しかも、観光に来た人は、「新鮮な魚が食べれた、安かった」と満足して帰って行く。みごとに、「WINWINの関係」を作り出している。あれあれ、せっかく、ゆっくりしようと思って来たのに、頭は休んでいないらしい。

さて、ここまで書いたところで、どうしても書きたいことが浮かんできた。生き方に迷ってる人、これからの人生を充実したものにしたい人、心が清らかになりたい人、子供の生き方に道しるべをさしてあげたい人、自分の越し方を振り返りたい人、おすすめの方法があります。鹿児島県の知覧という町に特攻隊で散っていった若者たちがお母さんに出した手紙が多数掲示されています。本当は死にたくないはずの彼らが出撃の日、最後の日に母親に出した手紙です。軍の検閲を受けるので本当の気持ちを直接的に表現出来ない中、お母さんに当てて書いた手紙です。読むと、立ちすくみます。自然に涙があふれて来て、止まらなくなります。心が洗われます。純粋な気持ちになれます。来年の春には、九州新幹線も開通します。博多から鹿児島は、1時間強で結ばれます。行って見ませんか？「自分のこれからの人生を豊かにするために」